近世農村における学習・文化活動の基盤(1)

―学習・文化活動の指導層としての上層農民―

手打明敏

はじめに

小論は、近世農村における学習・文化活動の指導層として上層農民が、民衆教育史上に果した役割について検討しようとするものである。

筆者は、近代以降の農民の学習・文化活動に関する史的研究の一環として、明治前期に埼玉県と群馬県の上層養蚕農民によって展開された養蚕技術普及活動についての研究報告をおこなった。[1]

そうした活動は養蚕農民にかぎったことではなく、上層農民を中心として農業技術の改良・普及活動が展開されていたのである。こうした点に、農村社会における上層農民の歴史的役割があったと思われる。

明治時代の農村社会の暮らしを回想した、ある小作農民は次のように述べている。[2]

「村を掩うような大木を目指してゆけば、古木の生い茂る広い屋敷の家である。白壁の塀に取り囲まれた中に一際大きい家と白壁の土蔵が幾棟も並んで建っていたら間違いなく大地主であった。三〇〇俵から五〇〇俵か一〇〇〇俵の「よまいとり」(徳米とり、小作とり)で、多くはその昔庄屋だったという家柄だった。村の耕地の半分近くがこの地主の所有だったので、その権勢は大きかった。篤農とか豪農とか呼ばれ、資産家だったから学識もあれば、心身に余裕もあって社会の開発者であり、指導者であった。そして厳然たる有志で、農民から「旦那さん」「ごりょうさん」「ぼっちゃん」「じょっちゃん」と呼ばれて尊敬されていた」

また、大正期に少年時代を過ごした、ある大地主の息子は、祖父からしばしば次のような話しを聞いたと回想している。[3]

「地主の息子は地方に住んで、地方の文化に貢献しなければ、地方はさびれるばかりだ。大学を出た者が東京にばかり集まることは、大きくいえば日本のためにならぬ」

右に引用した回想に出てくる地主は、村内にあって指導的な役割を果していた在村地主である。そして、この在村地主の中で、幕末期から明治期にかけて地主手作経営に従事し場合によっては農村小工業の経営者として活躍した社会層が豪農といわれている。(4)

豪農あるいは在村地主といわれる上層農民は「社会の開発者であり指導者」であり「地方の文化に貢献」することを自己の社会的任務として自覚していたことがうかがわれる。彼れらは、庶民階層の上層に位置し、その財力を背景に農村の知識人・文化人として地方社会の啓蒙活動にも大きな役割を果してきた。人材を養成するため私塾を開発したり、学資を援助するなどの事業が幕末・維新期に広く各地の豪農・名望家層によって取り組まれ、地方文化の開発にも少なからざる寄与をなしたのである。(5)

筆者は、上層農民によるこうした学習・文化活動は、幕末・維新期に突如始められたのではなく、近世社会で徐々に形成・展開され、それが明治以降にも引きつがれていったのではないかと考える。近世農村における上層農民を学習・文化活動の指導層としてとらえる意図は、この点の究明にかかわっているのである。

一、研究史の概観

(一)日本近世史研究からの示唆

筆者が、近代農村における農民の学習・文化活動を理解するために、近世農村における学習・文化活動へ接近することを考えるに至ったのは、次のような日本近世史研究の動向に示唆されたことによる。

たとえば『江戸時代と近代化』と題するシンポジュウムにおいて、日本近世経済史の大石慎三郎は、現代日本の原型が江戸時代に形成されたと論じている。その一つの指標として、大石は「庶民の形成」をあげている。大石によれば、中世までの庶民の存在形態は家父長制的な奴隷制ともいうべき形態で、少なくとも自立した小農経営形態は存在しなかったが、江戸時代には小農という形での庶民が現われてきたというのである。(6)

また、数量経済史的手法をもちいて近世経済史を研究している速水融は、江戸時代の農業が「家族労働力に依存する小経営が一般化した」(7)ことにみられるように、人力(man－power)による畜力(horse－power)の代替という経済発展論において通例考えられているものとは逆の性格をもった変化が進行したことを指摘している。そして、この変化こそ近世農民をして勤勉革命(industrious revolution)とでも名づけることができる変化を体験させることに

なったのである。速水は、この勤勉革命によってイングランド型とはちがう日本型とでもいうべき「工業化」が進行したとみている。[8]

近世文化史の尾藤正英は、経済史研究とはちがった視点で近世以前と以後で日本社会は質的に変化をしたという立場から、近世を境とした2分法の時代区分を提唱している。[9]

以上検討してきたように、江戸時代を近代の出発期としてとらえる見方が日本近世史研究の動向にみられるのである。

(二)社会教育史研究の動向

それでは次に、社会教育史・民衆教育史の研究で「近世」がどのように扱われてきたかを検討することにしたい。

従来までのわが国社会教育史研究の関心は近代以降にあり、戦後にかぎっていえば、近世社会教育史研究に関しては、めぼしい成果をみることはできない。

戦前期にまでさかのぼれば、昭和13年に刊行された石川謙の大著『近世日本社会教育史の研究』と『石門心学史の研究』をあげることができる。『近世日本社会教育史の研究』は、社会教育史とタイトルをつけてはいるものの、石川もことわっているように、わが国近世社会教育の全般に亘って、その史的発達の様相を通観したものではなかった。その構成をみると、三部編成になっている。第一編は、藩校や五人組帳の研究など幕府や藩のおこなった庶民教化政策についての研究である。第二編と第三編は石門心学についての研究からなっている。ここに収められた石門心学に関する研究を含めて、石門心学の研究を集大成したのが、『石門心学史の研究』である。これは18世紀から19世紀にかけての近世社会で石門心学が普及していった過程を克明にあきらかにしたものである。

その後、近世庶民教化史研究については、この石川の研究をこえる成果が出されているとはいえない。こうした研究状況に対する反省から、新しい視点にたった近世社会教育史研究の必要性が石川の弟子であった小杉巌によって提唱された。

小杉は『日本近代教育百年史』第七巻「社会教育史（1）」（国立教育研究所編・一九七四年）の序章「幕藩体制下の庶民教化」を執筆している。序章の「結び」にあたって小杉は、従来、社会教育、あるいは社会教化の名のもとに扱われてきたのは上から下へはたらきかける活動が中心であり、「社会教育を、自発的な学習への自己活動の促進に貢献するもの」[10]という観点からみたとき、研究の蓄積としてはあまりにも乏しすぎると指摘している。小杉は、幕藩体制下では、農民や町民に対して納税や生活行動に到る細かい規程を定めた諸々の禁令禁制が定められていたが、しかし、そのもとでも元禄・化政期にみられる町人文化が生み出されているのであるから、法制的な側面からのみでは幕藩体制下の庶民の生活行動はとらえきれないことを指摘している。

こうした反省に立って小杉は、今後の研究課題として社会推移

の根底として文化の問題、儒学・国学・洋学などの学問の普及、口コミをふくめた情報伝達の解明をあげている。

これら3つの課題の解明を目ざした近世社会教育史の研究は教育史の研究者よりもむしろ、隣接領域の研究者によって研究成果が蓄積されているように思われる。

たとえば、国学の庶民レベルへの普及については、古くは伊東多三郎『草芥の国学』(12)（昭和二〇年羽田書店）がある。「草芥の国学」とは、庶民生活に広まった国学のことである。伊東は国学の国民生活史的意義を明らかにするという意図から「庶民生活と国学との関係はどうであったか、国学は草芥深き地方の生活の中にいかにして広まったか、それはいかなる生活史的意義を持っていたか」(13)の究明をおこなった。伊東の研究の中で、近世社会教育史研究として注目されることは、「気吹舎門人帳」の分析により、平田国学入門者の半数以上が「郷村の名主、庄屋、地主、町役人、富豪、宿駅の問屋本陣等が最も多く、神職と共にいずれも郷土生活の指導的地位に立つ」(14)庶民層であったことを明らかにしていることであろう。庶民層に国学が広がっていったことにより「国学の神道思想を基盤として、農業と農民の勤労との倫理的意義を確立せんとする努力」(15)が払われるようになった。また、「神仏混合、その他雑駁な信仰・迷信を持ち、仏事法要、その他種々の祭式行事を持つ郷村の生活習俗に対して、純潔、明浄を尊ぶ古神道の宣布に依って刷新を加えんとする気運が自主的に起こって」(16)、庶民生活の向上に国学が貢献したことを明らかにした。

この他、芳賀登、松本三之介編『国学運動の展開』（『日本思想大系51』、岩波書店・一九七一年）は、幕末動乱期における「草芥の国学者」の思想を集成している。編者の一人である芳賀登の解説「幕末変革期における国学者の運動と論理」は、村落レベルでの国学者の活動が庶民の日常生活と結びついた文化運動であったと論じている。

洋学の村落への普及については、田崎哲郎『在村の蘭学』（名著出版・一九八五年）の三河地方をフィールドにした研究がある。田崎は、蘭学塾門人帳の分析をおこない、蘭学者のなかには意外に農村出身者が多いこと、また、蘭方医のなかには帰村して種痘の普及に大きな役割を果たした者がいたことなどを明らかにした。そして、田崎は幕末期の蘭学学習者には、幕府や藩に仕えることを指向した為政者指向型＝体制内指向型の他に、もう一つ庶民的蘭学＝在村蘭方医型のものがあったことを指摘している。(17)

近世倫理思想史の布川清司の近世民衆教育についての研究も注目されるところである。布川は『近世民衆の暮らしと学習』（神戸新聞出版センター、一九八八年）の中で、これまでの日本教育史研究には研究方法のうえで二つの大きな欠陥があったと指摘している。

一つには、「教え育てる」という、いわば上から下への教育観で研究がなされてきたということである。それに対して布川は「学

び習う」という下から上へという教育観を提示するのである。つまり、子どもたちの自発的でひたむきな学習意欲を教育史の対象にとりあげようとしている。布川は、「江戸時代の民衆教育といえば、ふつうは寺子屋教育と私塾だけが想起され、その研究も師匠の名前・師匠の出自・寺子の数・教科書名などと羅列されてすまされてきたのではなかったろうか」[18]と批判している。

第二に、教育を児童期（寺子屋）と青年期（私塾）に限って考えてきたことへの批判である。布川は「江戸時代の民衆教育を従来のような児童期と青年期だけに限定しないで、民衆の全生涯にまで視野をひろげて考え」[19]る視点を提示している。この第二の視点について布川は、自分・家・村と町・村外という場面を設定し、人々が年中行事や冠婚葬祭・家業・家訓・慣行・伝承・村方騒動などを通して生きるチエ・ワザを身につけていったことを明らかにしている。

高橋敏も「民衆の主体的教育・文化創造」として民衆教育史研究をとらえ「近代公教育、主として学校教育を中軸にそこから出発し、帰結することで満足した教育史研究」からの脱却をはかっている。[20]そして、高橋は従来までの文献中心の研究方法に対して、柳田民俗学の手法を取り入れ、石造物の分析から民衆の主体的文字獲得のコースを明らかにしている。

小杉巌が従来までの近世社会教育史研究に欠落していると指摘していた、民衆自身による主体的自発的な学習、文化活動の営為は、民衆史や民俗学的方法による研究のなかで、しだいに明らかにされつつあるといえる。

二、近世農村における上層農民

通例、江戸時代の農業の指標としては、太閤検地によって打ち出された一五九八（慶長三）年の石高約一八五〇万石から推計された耕地面積一五〇万町歩というデータが使われている。その他に石高と耕地面積の両者があまりへだたらない時期において判明するのは、元禄年間（一六八八～一七〇四）の石高二五七八万石と、享保・延享（一七一六～一七四八）頃の耕地面積二九七万町歩というデータがあるにすぎない。[21]宮本又郎は、この二つのデータをもとに江戸時代の耕地面積と石高を表1のように推計している。さらに、この推計データと表2の「耕地開発土木工事件数」と表3の「村落増加数・増加率」の三つのデータから、宮本は、17世紀初めから18世紀にかけては耕地の著しい拡大がみられるが、18世紀初頭から19世紀にかけては耕地開発は全体的に停滞し、19世紀に入ってから再び開発が活発になったと推定している。[22]

このように増加した耕地と村に対して幕藩体制下の領主が期待したのは年貢であった。近世の村々は検地によって設定され、村請制のもとで年貢負担の単位であった。村は連帯責任の単位であり、治安や秩序は村ごとに維持すべきものとされ、人々はすべて

表1　江戸時代の耕地面積と石高

（実数）

年	耕　地（千町）	実収石高（千石）
1600	2,065	19,731
1650	2,354	23,133
1700	2,841	30,630
1720	2,927	32,034
1730	2,971	32,736
1750	2,991	34,140
1800	3,032	37,650
1850	3,170	41,160
1872	3,234	46,812

年成長率（%）

年	耕　地	実収石高
1600～1650	0.26	0.32
1651～1700	0.38	0.56
1701～1720	0.15	0.22
1721～1730	0.15	0.22
1731～1750	0.03	0.22
1751～1800	0.03	0.22
1801～1850	0.09	0.18
1851～1872	0.09	0.59

出典：速水融・宮本又郎編『経済社会の成立』（日本経済史１）岩波書店，昭和63年，P44より作成

表2　耕地開発関係土木工事件数

	河川工事	溜　池	用水路	新田開発
1550年以前	25件（20.5%）	46（12.9）	24（5.5）	
1551－1600	16（13.1）	3（0.8）	11（2.5）	14（1.4）
1601－1650	31（25.4）	66（18.5）	55（12.7）	122（12.2）
1651－1700	13（10.7）	93（26.1）	121（27.9）	220（22.1）
1701－1750	11（9.0）	27（7.6）	52（12.0）	103（10.3）
1751－1801	12（9.8）	23（6.4）	31（7.2）	88（8.8）
1801－1868	14（11.5）	99（27.7）	139（32.2）	450（45.2）
計	122（100.0）	357（100.0）	433（100.0）	997（100.0）

出所：土木学会編『明治以前日本土木史』岩波書店，1936年，より作成

出典：表１に同じ，P45

表3　村落増加数・増加率

	1645－1697年		1697－1830年		1830－1873年	
	村落増	増加率	村落増	増加率	村落増	増加率
西日本	2,029	7.8%	170	0.6%	2,699	9.6%
東日本	5,506	18.7%	418	1.2%	3,465	9.8%
全　国	7,535	13.6%	588	0.9%	6,164	9.7%

出所：菊地利夫『新田開始』上，古今書院，1958年，より作成

出典：表１に同じ，P46

村の百姓となった。[23]

村を構成する中心的階層は「本百姓」であった。本百姓とは、公式の土地台帳に登録された耕地を持ち、年貢・諸役を負担する百姓であった。典型的な本百姓像をえがけば、田畑合わせて一町歩前後の耕地と屋敷地を持ち、それを家族労働力をもって経営している、きわめて小規模な経営階層であった。[24] 近世の村は、本百姓を基底とし、これら本百姓は五人組という小規模な近隣組織を構成していた。そしてその上に、名主・組頭・百姓代から構成される村方三役とよばれる村役人がおかれていた。

このうち、名主・組頭は領主支配の代行として、年貢や夫役または村入用の割り当てなどの業務をおこなった。これに対して百姓代は、一般村民の代表として名主や組頭がおこなう領主権力の代行業務を看視するとともに、一般村民と名主・組頭との間に立つ調整的な役割も担っていた。[25]

古島敏雄は、年貢負担の連帯責任制とそのもとで実質的な取りまとめ役であった名主・組頭などの上層農民に注目して次のように述べている。[26]

「村に年貢が賦課され、村役人が個々の百姓に分賦する制度の下では、村役人は読書計算の能力を要求され、その他に行政上の事務処理能力と帳簿管理能力を必要とする。そのような村役人層は同時に大高持の下人労働使用者である。村役人事務に従事するためにも下人労働ならびに自己経営の管理の方式を必要とする。下人の労働の監督を中心目標として作業日記をつけ、さらに金銭出納や農事の記録を残す風が、江戸時代中期以後一般化するが、そのような方式が生じたばあいは、当然、自己経営の収支や農作業の効率は数量的に把握しうるものとなる」

古島が指摘しているように、村役人などの上層農民には行政実務能力として計算能力が要されたのである。また、農事日記や耕作帳などの出現にみられるように、農民の中で労働日記や貨幣収支の記帳が広くおこなわれるようになってきた、そうした観察記録のなかから新しい作業方法や品種の優秀性が確認されるようになると、それらの知識や技術が叙述されるようになってきた。[27] 同時に、こうした篤農家によってあらわされた農業技術書（農書）は、自己の経営・技術を改良し、生産力を高めることを望む農民によって受け入れられたと思われる。

三、農書・蚕書・和算書

(一)農書・蚕書の出現と普及

表4は、農書と蚕書を成立時期ごとに分類したものである。わが国でもっとも古い農書は、一七世紀中期（一六二九～一六五四年ごろとされている）に伊予国宇和地方の武将西園寺氏の被官であった土居清良によってあらわされた『清良記』であるとされている。[28] その後、一七世後半にかけて5冊の農書が成立している。

表4　農書・蚕書成立の時期別一覧表

	農書（冊数）	蚕書（冊数）
17世紀後半（～　1699年）	6	1
18世紀前半（1700～1749年）	17	4
18世紀後半（1750～1799年）	21	18
19世紀前半（1800～1872年）	77	71
計	121	94

農書については古島敏雄編『農書の時代』昭和55年　農文協のⅣ「地域別・主要農書一覧」（佐藤常雄）より作成。蚕書については奥原国雄『本邦蚕書に関する研究』　昭和48年（未刊行）より作成

この中には元禄一〇（一六九七）年に宮崎安貞があらわした『農業全書』が含まれている。『農業全書』は、全国的に普及した最初の農書であった。宮崎安貞の『農業全書』執筆の意図は次の点にあった。

「我久しく民間にありて、農人の日々に勤る所はかりみるに、其術委しからずして、其法にたがふ事のミ多し。然るゆへに、身を労し心を苦しめて、勤めいとなむといへ共、効を得る事すくなくして、や々もすれば、秋のなりはひの不足をみることしバゝなり、是土地のあしくして、且其勤めいとなミのたらざるにハあらず。唯ひとへに民皆農術をしらずして、稼穡の道明からざるゆへなり、是誠に憐むべく慌むべき事の甚しきなり。

凡天下の事、必致知と力行と兼ざれば其の功なりがたし。故に先よく農術をくりて後農功を勤むべし。且恒の産なければ、恒の心なし。衣食たりて後、礼儀行ハるる理なれば民種植の道をよくしりて五穀ゆたかに、衣食の養ひたりて、各其所を得バ、をのづから貧る心もなく、礼儀廉恥行ハれ風俗すなほに、人心和順し、一世安楽ならん事、日々に新に、月々にさかんなるへし」[29]

宮崎安貞は、農民の福利向上のためには農業技術の改良が必要であると考え、諸国を巡歴して先進的な農業経営をおこなっている上層農民を訪ずれ、彼らが開発した農耕方法を聞きとり経営記録等の資料を分析した。そして、それらの知識・技術を一般化・体系化して書きあらわしたので、『農業全書』は全国的に普及した。

その後一八世紀前半までに17冊、一八世紀後半に21冊、さらに世紀前半になると77冊と農書の数は急激に増加している。

蚕書についても、農書と同じく19世紀に入って急激な増加がみられる。

このように一九世紀に入って、農書や蚕書の成立数が急激に増加してくることについて、農業史の岡光夫は「19世紀になると二〇石から三〇石の比較的裕福な自作農の進出が目覚ましくなり、従来主役を演じた豪農層の動きが停滞し、主客逆転することとな

った[30]」と指摘している。すなわち、一七・八世紀に農書を著述した豪農層が土地集積の進行にともない、小作経営や兼業の諸営業に主力を注ぎ、農耕への関心が薄れていったため、自作農層が代わって農業技術の改良・普及の主役として登場してきたのである。

また、学問の普及が自作農層にまで浸透しみずからの考えを書きあらわすことができる層が広がっていったことも大きく影響していると思われる。農書の学問的背景が一七・八世紀の豪農層にあっては、伝統的に中国の教養であった。しかし、それでは現実の農業技術の動きに対応できなくなったため、自作農が国学や心学などを背景として、みずからの農事体験を組み入れた実用的農書を作成する方向に進んだのである[31]。

しかも、この時代になると、藩によっては篤農家＝老農の実力を認め、農書の普及に便宜を計るようになった。

たとえば、広島藩は文化六（一八〇九）年、大蔵永常の『農家益』を代官を通じて割庄屋に下げ渡している[32]。

「態申遣ス

櫨植付製方之事ヲ書顕シ農家益と申書物下ケ渡有之、壱部宛下ケ渡候委此旨相心得、追々御植弘メ候得者、御国産相増事ニ候得者、右書物組合村々へ相回し相知セ置候様取計可申者也

巳八月

伴伝右違門

井口于之丞

割庄屋宛」

また、文化一四年には福井藩が児島如水・徳重共著の『農稼業事』の抜書を作成して村々に配付している[33]。

「中領（包紙）

上大庄屋共」

口上之覚

一、此度組下村々江農稼業事抜書帳面御渡被成、則私共ゟ委細為読聞相渡可申旨被仰渡承知奉畏候、然ル処右御帳面村々へ相渡候上者、村々之内右抜書之趣若合点行兼候村方ハ、私共方へ問合ニ罷出候義も可有御座哉ニ奉在候、然ル時ハ私共方ニ扣等無御座候而ハ如何敷御座候間、右農稼業事抜書御帳面私共五人へ壱冊ツゝ被下置候様奉願上候、右之訳合ニ御座候間何卒御渡被下候様奉願上候、以上

（文化十四年）
丑八月

中領

大庄屋共」

福井藩では、大庄屋に配布された「農稼業事」が、村々に配布され、村々ではこれを農民に伝へ質問にも応じる体制がとられたのである。

その他、水戸藩では大蔵永常『綿圃要務』を天保年間（一八三〇～一八四四）に村々に配布して綿作りを奨励している。また、安政一二（一八五五）年に小倉藩では、やはり大蔵永常『除蝗録』

を一村に一部そなえさせる処置がとられている。[34]

この時期に顕著なことは、上層農民による農書や蚕書の執筆（百姓の農書）の他に、大蔵永常（一七八八～？）や佐藤信淵（一七六九～一八五〇）などの農学者があらわれ、大量の農書（学者の農書）を執筆し、それらが「出版業者」の手で刊行され全国的に普及するようになったことである。こうして大量の農書が印刷や筆写という方法で普及するようになり、農業技術改良が展開される基盤が農村に広く形成されていったのである。

(二)和算書の普及

すでに指摘したように、江戸時代の村役人を努める上層農民には行政実務能力として計算能力が要求された。幕藩体制の経済的基盤である年貢算定の基となる検地が正確におこなわれるようになったため、土地測量や石高の計算能力が名主や百姓代などの村役人層にとって不可欠なものとなったのである。

そうした計算の手引として和算書があった。和算は、戦国期から江戸時代にいたるあいだの軍事的・経済的諸問題、たとえば築城その他の土木工事・鉱山開発・検地・かんがい等の測量や外国貿易と関連して発達した。[35] そして各種の和算書が刊行されるようになり、和算の知識が一般の民家にまで広く普及していった。表5は、幕末期までに執筆された和算書の数を時期別に示したものである。一九世紀に入って急激に増加していることがわかる。和算書の中でもっとも普及したのが吉田光由著『鹿劫記』、およびその流れをくむ実用和算書であった。とくに『鹿劫記』は、そろばん計算による算術書で、題材を当時の社会の日常生活に求めて数理を説明し、内容の配列も教育的で理解しやすかったから、人々に大いに歓迎された。[36] 多くの需要に応えるため吉田光由みづから、『鹿劫記』を改編して何回も出版したほかに、出版業者が勝手に復刻したりして長期間にわたって版を重ねて出版され、和算の入門書として広く普及した。

和算の知識が近世の村に広く普及し、また求められていたことは、村々をわたり歩いた人間の旅日記などを通して知ることができる。[37] たとえば、天保七年八月、甲州におこった一揆の頭取の一人、犬目村の兵助（現在の山梨県北都留郡上野原町犬目）が召捕を避けて出奔し、その途中で書きつづった逃走日記にみることが

表5　刊本暦算書一覧表

（冊数）

Ⅰ　17世紀後半（～　1699年）	175
Ⅱ　18世紀前半（1700～1749年）	178
Ⅲ　18世紀後半（1750～1799年）	247
Ⅳ　19世紀前半（1800～1872年）	553

遠藤利貞遺著『増修日本数学史』昭和35年恒星社厚生閣所収の平山諦「刊本暦算書年表」より作成。ここには和算書，天文暦書，測量術書が含まれている。
この年表では，吉田光由『鹿却記』のように各種の異板本や後摺本があるものは，それらを別々に扱っている。

表六　犬目村兵助の日記の抜粋（天保七年（一八三六）九月六日～八年八月二十日）

十月二十二日	中村百姓新蔵宅でそろばんを好むので泊り、（丹後・丹波国境）
二十四日	「右村出立。夫より伊崎村百姓辰兵衛ト申者宅ニ□泊リ申候。尤此家ニ〇廿五日〇廿六日〇廿七日〇廿八日、尤同人伜ニ五日之間そろばんおしへてをり申候。尤とうりう（逗留）中ニさかやきすり（剃）申候。夫より右村出立。」
二十九日	林村百姓友右衛門宅泊。そろばん指南。
十一月　十日	丹波・播磨国境、東坂本村百姓喜兵衛宅に逗留してそろばん・家相指南。（十一日まで）
十三日	新定村百姓吉郎兵衛宅泊。そろばん指南。（十四日まで）
二十六日	磯上村孫之丞宅泊「〇廿七日、右村同人宅出立積ニ御座候所、算術好ニ付、とうりう仕候間、猶又□泊り候」
十二月　十日	（四国に渡る）
二月十三日	東明神村（愛媛県上浮穴郡）で百姓宅に泊まりながら三月八日まで逗留。そろばん指南をしながら逗留することが多い。
三月二十八日	八百地村百姓宅に逗留してそろばんを教える。（二十九日まで）
四月　一日	（今治城下へ入り、「新国八十八ケ所」を廻り始める。）
三日	大雨で本圧村百姓宗次宅逗留。竹細工をし、そろばん指南、四日も逗留。
八日	余所国村弥助宅を出がけに、八算の割かけ（算盤の割算法）を書いておいてくる。同村百姓伊八方で中飯。同村百姓文次宅で八ツ時（二時頃）から算術指南。同人宅泊。善根。
十二日	名駒村百姓文作にそろばん指南。算法を書き、中飯を得る。大島「新国八十八ケ所」廻り終る。大願成就。本圧村百姓惣次郎宅泊、善根。
十五日	余所国村百姓力蔵にそろばん指南。伯方島へ渡り、木野浦村百姓作左衛門宅泊。
十八日	瀬戸田島（生口島）脇村へ、庄屋京清に長時間の算術指南。同村百姓源次郎宅泊。
二十日	「（大三島出立。）夫より大三島山へまいり申候。夫より同島内ひかい村ニて庄屋ニ付、差宿ニて、同村百姓喜平次ト申者ニ（ママ）のそミ（望み）ニ付、開平・開立伝次（平方根・立方根計算　伝授）仕、善ごん（根）に相成申候□泊り。」
二十五日	大田村（安芸国）林助宅でそろばん指南。野見の大村百姓孫四郎宅泊。
五月　一日	宮島をめざす。廿日市村百姓橋本屋吉蔵宅泊。善根。そろばん指南。
五日	油見村庄屋源左衛門宅で休み、源左衛門と同村新兵衛の両人にそろばん指南。源左衛門宅泊。
六月二十日	（紀伊に入り、翌日高野山へ。）
二十二日	泊った寺に算術書を書きのこす。
七月　三日	吉野郡北村儀兵衛の手引きで同村源次郎宅泊、算術指南。
十日	伊泉屋（奈良）林兵衛宅で朝飯、善根。市坂村市松宅でそろばん指南、椿村庄屋卯兵衛宅で夕飯、善根。同村の氏神に泊り。
八月　五日	名主文吉宅逗留、算術指南。六日～二十日、同人宅逗留、算術指南、二見浦へ行く。朝熊山参り、伊勢内宮参り、伊勢外宮参り。

深谷克己『八右衛門・兵助・伴助』（朝日評伝集20）昭和53年一〇一～一一四頁より作成

できる。[38]

兵助の逃走経路は、犬目村から埼玉県の三峰山へぬけ、そこから高崎・善光寺を経て糸魚川に出て日本海岸を西下し、福井県の敦賀を通って天橋立から福知山へぬけ、岡山を経て四国にわたっている。そして、再び広島へ出て東上し、高野山・奈良・京都をへて伊勢神宮参りをするところまで日記が残っている。この間約一年間（天保七年九月六日から天保八年八月二十日まで）にわたっている。この日記の中で、兵助のもっている和算の知識を求める各地の農民の様子が書かれている部分を整理したのが表6である。

この表にみられるように、そろばん、算術については、百姓やその家族の「無心」がつよく、「出立積ニ御座候所、算実好ニ付とうりう仕候」（天保七年一一月二七日）というような場合さえあった。兵助が歩いた広い範囲にわたって農民たちの和算への関心と知識習得の意欲が強いことが読みとれる。兵助が立ち寄った村の人々が、けっして好事的関心から和算をならったのではないことは、兵助が信心によってよりも、和算の知識と技術によって食事や宿所を与えられていることからもあきらかであろう。そろばんが村役人以外の百姓家にも普及していたのである。[39]

(三)所有文書からみた農書・蚕書・和算書の普及状況

――群馬県・埼玉県を事例として――

前節までにおいて、農書と和算書が上層農民を中心として広く求められていたことを明らかにしてきた。

つぎに、ここでは近世農村における農書ならびに和算書の普及の実態を群馬県と埼玉県の場合を事例としてみてみることにしたい。資料としては『群馬県近世資料所在目録』（30巻　平成元年10月現在）と『埼玉県近世史料調査報告』（27巻 平成元年10月現在）を手がかりとして検討することにしたい。

なお、『群馬県近世資料所在目録』は県内を悉皆調査したものである。ただし、東毛地方（現在の新田郡・山田郡・邑楽郡・太田市・桐生市・館村市を含む地域）の史料目録は刊行されていない。また、『埼玉県近世史料調査報告』は、県内の主な文書所有家の調査である。このように、使用する資料は、調査方法にちがいがあり、かつ両県の全域をカバーしたものではないという限界がある。しかし、この資料から、近世期における両県内の農書と和算書のおおよその普及状況の傾向をさぐることはできよう。

表7と8は、資料調査によって確認された農書・蚕書・和算書を郡市別にまとめたものである。すでに指摘したように、資料目録作成の調査方法がちがうため、両県について比較することはできない。しかし、和算書については、両県に残されている和算書の数からみて、両県内にかなり普及していたことが推定される。

たとえば、表9と10は、両県の神社、仏閣に奉納された算額[40]とそこに書きつけられた和算の問題数を示したものである。群馬県では文化七年（一八一〇）から慶応四年（一八六八）までに40面・

表7　群馬県

地域	郡市別	農書（冊数）	蚕書（冊数）	和算書（冊数）
北毛	利根郡 沼田市	1	10	29
	吾妻郡	2	2	29
	北群馬郡 渋川市	4	7	11
中毛	勢多郡 前橋市	12	3	35
	佐波郡 伊勢崎市	0	1	14
西毛	群馬郡 高崎市	1	0	53
	碓氷郡 安中市	3	0	13
	甘楽郡 富岡市	2	2	1
	多野郡 藤岡市	0	2	8
	合計	25	27	193

表8　埼玉県

	農書（冊数）	蚕書（冊数）	和算書（冊数）
北足立（新座）	3	0	9
入間（高麗）	1	1	3
比企（横見）	0	0	3
秩父	4	0	3
児玉〔加美 那珂〕	1	0	1
大里〔幡羅 榛沢 男衾〕	1	0	8
北(南)埼玉	5	0	24
北葛飾（中葛飾）	3	0	6
計	18	1	57

※1　『群馬県近世資料所在目録』と『埼玉県近世史料調査報告』に掲載されているものを集計したが，明治5年（1872年）以降のものは除いた。

※2　この表では，農書として，古島敏雄「農書の時代」に収録されているものをとりあげた。ただし佐藤信淵のものについてはすべてとりあげた。また，「勧農固本録」「農術鑑正記」などの地方役人の勧農書や歴算書である「農家調宝記」や「農隙余談」のような教訓書のものも含めてある。

177問、埼玉県では享保一一年（一七二六）から慶応二年（一八六六）までに37面・142問が確認されている。参詣人が多数あつまる神社・仏閣に奉納された算額は多くの人々にふれるところとなり和算への関心を高めていったことが考えられる。

和算書のなかには、『鹿劫記』のほか、当時の代表的な和算の流派である関流・最上流・宮城流などの和算書が含まれている。また、この中には「地方落穂集」や「算法地方大成」のような村役人が必要とした算法実用書も含まれている。

蚕書についてみると、近世期の養蚕地域であった群馬県には、蚕書が数多く残されている。とくに北部山間地帯の利根郡や北群馬郡に数多くみられる。一方、明治以降に養蚕の普及が本格化する埼玉県では、ほとんど蚕書が残されていない。

表10　算額分布表（埼玉県）－郡市別

	算額数	問題数
川越市	4	14
羽生市	3	12
本庄市	2	4
所沢市	2	1
大宮市	2	3
加須市	2	19
熊谷市	2	2
草加市	1	1
鳩ヶ谷市	1	2
川口市	1	6
戸田市	1	6
行田市	1	2
浦和市	1	4
八潮市	1	1
越谷市	1	1
与野市	1	1
比企郡	4	9
秩父郡	3	46
北埼玉郡	2	4
児玉郡	1	2
北足立郡	1	2
計	37	142

出典：表9に同じ、P238～239より作成

表9　算額分布表（群馬県）一郡市別

	算額数	問題数
富岡市	8	36
高崎市	7	22
太田市	4	7
安中市	2	15
伊勢崎市	1	7
藤岡市	1	2
桐生市	1	3
渋川市	1	1
前橋市	1	2
群馬郡	3	17
佐波郡	3	8
甘楽郡	2	9
吾妻郡	2	10
邑楽郡	2	30
碓氷郡	1	7
勢多郡	1	1
計	40	177

三上義夫『文化史上より見たる日本の数学』
恒星社厚生閣　昭和59年6月
P236～237より作成

表11　群馬県・埼玉県内の農書普及状況（年代別）

群馬県／埼玉県　合計　（冊数）

	17世紀後半まで ～1699年	18世紀前半まで 1700～1749年	18世紀後半まで 1750～1799年	19世紀前半頃まで 1800～1871年	刊行年・不明	計
農業全書 宮崎安貞 1697（元禄10）	1／2　3	0	0	0	2／3　5	8
土州弁 佐藤信景 1724（享保９） （佐藤信淵　増補）	—	0	0	0	4／0　4	4
勧農固本録 万尾時春 1725（享保10）	—	1／2　3	0	0	2／0　2	5
農術鑑正記 砂川野水 1723（享保８）	—	0／1　1	0	0	0	1
農隙余談 利根川教豊 1783（天明３）	—	—	0／1　1	0	0	1
培養秘録 佐藤信季 1817（文化14） （佐藤信淵　筆記）	—	—	—	3／0　3	1／0　1	4
除蝗録 大蔵永當 1826（文政９）	—	—	—	1／1　2	0	2
豊稼録 大蔵永常 1826（文政９）	—	—	—	1／0　1	0	1
十文号糞培例 佐藤信栄・不明 （佐藤信淵　筆記）				2／0　2	2／0　2	4
農家調宝記 高井伴覚・不明				3／8　11	2／0　2	13
計	3	4	1	19	16	43

表12　蚕書普及状況（群馬県）　（冊数）

	17世紀後半まで ～1699年	18世紀前半まで 1700～1749年	18世紀後半まで 1750～1799年	19世紀前半頃まで 1800～1871年	刊行年・不明	計
蚕養育手鑑 馬場重文（群馬） 1712（正徳２）	—	4	0	3	0	7
養蚕秘書 塚田与右ェ門（長野） 1757（宝歴７）	—	—	1	2	4	7
養蚕茶話 佐藤友信（福島） 1766（明和３）	—	—	0	1	0	1
養蚕後篇 塚田与右ェ門（長野） 1789（寛政元）	—	—	0	0	1	1
養蚕秘録 上垣守国（兵庫） 1803（享和３）	—	—	—	0	2	2
養蚕輯要 玉井市郎治（長野） 1813（文化10）	—	—	—	1	0	1
養蚕女児訓 武田甚右ェ門（青森） 1823（文政３）	—	—	—	1	0	1
養蚕重宝記 中村弥七郎（長野） 1840（天保11）	—	—	—	1	0	1
蚕当計秘訳 中村善右ェ門（福島） 1849（嘉永２）	—	—	—	2	0	2
養蚕顕秘録 大竹惣兵衛（福島） 1859（安政６）	—	—	—	2	0	2
蚕種銘鑑 中井閑民（福島） 1860（万延元）	—	—	—	0	1	1
蚕養手引草 春夏亭秋冬（福島） 1860（万延元）	—	—	—	1	0	1
計	—	4	1	14	8	27

農書は、群馬県では中毛地域である勢多郡、埼玉県では埼玉郡・北葛飾郡といった県東部の水田地帯に数多く残されている。

表11は、両県に残されている農書の刊行（筆写）年代別一覧である。この表から、残されている農書数がもっとも多いのが、一九世紀前半で、両県合わせて19冊である。また、この表の中では「農家調宝記」が数多く残されている。その次に多いのが佐藤信淵のあらわした農書で、3種類、12冊が残されている。佐藤信淵の農書について、古島敏雄は、「現実からはなれ、確かめることをぬきにして、古典の記述をもとに推理を進め」[41]たものであるとみて、農書として高い評価を与えていない。しかし、佐藤は『農業全書』のみならず、巾広い読書から得た知識をもとに体系化された農書をあらわしており、後世に与えた影響は大きかったと思われる。

宮崎安貞の『農業全書』も8冊残されている。『農業全書』は、すでに指摘したように元禄一〇年の初出版以来、享保六年、天保七年、文化一二年・安政三年にそれぞれ再版が出されるほど広く普及した農書であった[42]。

表12は、群馬県内に残されている蚕書の刊行（筆写）年代別一覧である。農書と比べて蚕書の場合は、長野・福島といった当時の養蚕先進地域の人々によってあらわされた蚕書が群馬県内に広く流入していったことを示している。また、刊行（筆写）の時期別にみると、一九世紀に入ってからのものが9種類で残された数も14冊ともっとも多い。

表13　和算書普及状況（群馬県）

地域	郡市別	17世紀後半まで ～1699年	18世紀前半まで 1700～1749年	18世紀後半まで 1750～1799年	19世紀前半頃まで 1800～1871年	不明	
北毛	利根郡 沼田市	3	2	4	5	15	
	吾妻郡	1	0	2	13	13	
	北群馬郡 渋川市	1	0	0	4	6	
中毛	勢多郡 前橋市	2	1	1	14	17	
	佐波郡 伊勢崎市	0	0	1	5	8	
西毛	群馬郡 高崎市	0	0	6	23	24	
	碓氷郡 安中市	0	0	0	4	9	
	甘楽郡 富岡市	0	0	0	1	0	
	多野郡 藤岡市	0	0	2	1	5	
合計		7	3	16	70	97	総計 193

表14　和算書普及状況（埼玉県）

	17世紀後半まで ～1699年	18世紀前半まで 1700～1749年	18世紀後半まで 1750～1799年	19世紀前半頃まで 1800～1871年	刊行年不明	計
北足立（新座）	0	0	0	8	1	9
入間（高麗）	0	1	0	2	0	3
比企（横見）	0	1	1	1	0	3
秩父	0	0	0	2	1	3
児玉〔加美 那珂〕	0	0	0	0	1	1
大里〔幡羅 榛沢 男衾〕	0	0	0	1	7	8
北（南）埼玉	0	0	0	17	7	24
北葛飾（中葛飾）	0	0	1	5	0	6
計	0	2	2	36	17	57

著者別にみるとこの表の中では、群馬県出身の馬場重文によってあらわされた『蚕養育年鑑』と長野県出身の塚田与石ヱ門の『養蚕秘書』がそれぞれ7冊でもっとも多く残されていた。

和算書についても刊行（筆写）年代別にみると（表13・14）、やはり19世紀に入ってから刊行ないし筆写された和算書の数が急激に増加していることがわかる。

以上、群馬県と埼玉県の近世史料目録からみるかぎり、農書・蚕書・和算書は一九世紀に入って急速に普及していったとみることができる。

おわりに

小論を通して、江戸時代とりわけ一九世紀に入っての幕末期に、農書・蚕書・和算書が農村に広く普及していったことを明らかにした。こうした文書が普及した社会的背景としては、江戸時代後期に顕著となる自作上層農の成長と商品経済の浸透があった。

自作上層農は、生産力の向上をめざして自己の経営の改善に取り組み、彼らのなかでは労働日記をつけることが広くおこなわれるようになった。そして、農業経営を通して観察したことを整理し、そのなかから新しい作業方法や品種の改良などが実施されるようになった。こうした農業経営・技術改良の気運は、農民相互間での情報の交流を活発化させ農書や蚕書を購入したり筆写する

ことなどがおこなわれよるようになったと思われる。

また、商品経済の浸透にともなって、貨幣収支の計算が日常的におこなわれるようになった。さらに、村内の行政実務を担当した上層農民は、年貢米の計算や治水・測量等の業務をこなすうえで和算の知識が必要となった。そのため、和算書は上層農民を中心として広く普及していったのである。

このように、上層農民は村落内で農業技術改良のリーダーとして、また文化の普及者としての役割を担っていたのである。こうした上層農民の成長が、農村の学習・文化活動を支える人的基盤であったと思われる。

〈注〉

1、「明治期養蚕伝習所の技術普及活動と農民の学習」『淑徳大学研究紀要』第一八号、昭和五九年三月　「明治前期における養蚕改良団体の技術普及活動」『淑徳大学研究紀要』第二〇号、昭和六一年三月

2、楠本藤吉『村の暮らし――ある小作農の手記――』御茶の水書房、昭和五二年、一七～一八頁

3、坂田道太「私の履歴書②」日本経済新聞、昭和六三年七月二日

4、傳田　功『豪農』教育社歴史新書、昭和五八年　一〇頁

5、同前　一二頁

6、大石慎三郎、中根千技編著『江戸時代と近代化』筑摩書房、昭和六一年、九頁

7、速水　融・斉藤　修・杉山伸也編『徳川社会からの展望』同文館、平成元年　二四頁

8、同前　二八頁

9、平成元年七月二三日　愛知大学総合郷土研究所シンポジュウム「近世地方文化を考える」にての報告

10、『日本近代教育百年史』第七巻、昭和四九年　八六～八七頁

11、同前　八八頁

12、昭和五七年、名著出版より増補版が刊行された。

13、同前　一頁

14、同前　五頁

15、同前　八頁

16、同前　八頁

17、田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版、昭和六〇年　六九頁

18、布川清司『近世民衆の暮らしと学習』神戸新聞出版センター　昭和六三年　五頁

19、同前　六頁

20、高橋　敏『日本民衆教育史研究』未来社、昭和五三年　二五頁

21、速水　融・宮本又郎編『経済社会の成立』（日本経済史1）岩波書店、昭和六三年　四五頁

22、同前　四六頁

23、木村　礎『近世の村』教育社歴史新書、昭和五五年　七三頁

24、同前　一二四頁

25、同前　一〇二頁

26、『近世科学思想上』（日本思想大系62）岩波書店、昭和四七年　四四三頁

27、同前　四六九頁

28、古島敏雄編著『農書の時代』農文協、昭和五五年　一二一頁

29、『日本農書全集』第十二巻　昭和五三年　一八～一九頁

30、岡　光夫『日本農業技術史』ミネルヴァ書房、昭和六三年　二七八

頁

31、同前

32、同前　二八〇頁

33、同前　二八〇〜二八一頁

34、同前　二八一頁

35、『岩波講座・日本歴史』（旧）近世3、昭和四二年　二〇〇頁

36、大竹茂雄『数学文化史』研成社、昭和六二年、二七頁

37、たとえば、佐藤健一『和算家の旅日記』時事通信社、昭和六三年などがある。

38、深谷克己『八右衛門・兵助・伴助』朝日評伝選20、昭和五三年

39、同前　一一七頁

40、和算の問題・答・術（答までのすじ道）を板に書き、額にして、神社や仏閣などに「絵馬」のように奉納したもので、江戸時代の日本で流行した。（注37に同じ。三頁参照）

41、前掲『近世科学思想上』　四六六頁

42、前掲『農書の時代』一六三〜四頁

Learning and Cultural Foundations of Rural Area in the Edo Period (1)

— On Upper Class Farmers as Provincial Leaders —

Akitoshi TEUCHI

This paper attempts to clarify the meaning of upper class farmers as the learning and cultural activities in the Edo Period.

The paper covers :

1. The purpose of this study and studies with regard to the Edo Period by our early pioneers.
2. Upper Class Farmers in the Edo Period.
3. Diffusion of the Old Japanese Farming Books, the Old Japanese Sericultural Books, and the Old Japanese Mathematical Books.
4. Conclusions.

The main conclusions of the paper are as follows :

In the early 19th century, upper class farmers aimed to improve their agricultural productive force and they pursued the provincial adominstrations, for instance, tax assessment and collection. Therefore, the Old Japanese Farming Books, the Old Japanese Sericultural Books, and the Old Japanese Mathematical Books were demanded by them. After all, upper class farmers were not only agricultural leaders, but also learning and cultural leaders.